

令和6年度 2月校長会 教育長講話（要約）

リーディングDX 報告会について

2月10日、若草中学校区で開催された、リーディングDXスクールの公開授業に参加しました。当日は、市内の教員と市外・県外の教員を合わせて、150名を超える参加者があったと聞きました。午前中に訪問した2校の公開授業では、どの学年もICT端末を利用しながら、「主体的に学ぶ」ことに熱中していたように感じました。両校とも、「授業中にICT端末を使う」ことから歩みを進め、「ICT端末を基盤とする中で、主体的な学びを充実させる」ことについて実践されていました。

各校では、子どもたちの学びの姿はどのように変わってきていますか。先生から教えてもらわないと学びが進まないのではなく、子どもが主体的に学ぶ授業に切り替えることが必要です。

若草中学校区では、「リーディングDXスクール事業」を通じて、教員一人一人が自分事として、授業のあり方や目指す教育について考える機会となっていました。

令和7年 奈良市二十歳を祝う会について

先月の13日に開催された「奈良市二十歳を祝う会」に参加しました。会場となった奈良県コンベンションセンターには、第一部と第二部合わせて約2600名の新成人が集い、落ち着いた立派な祝う会が催されました。会場では、中学校を卒業して5年ぶりとなる級友との再会を喜び合う姿が見られ、見ている私も感動する場面が多くありました。

祝う会では、コミュニケーション分身ロボット「OriHime（オリヒメ）」を発明された、株式会社オリイ研究所所長、吉藤オリイ氏の講演がありました。

吉藤オリイ氏は講演の中で、「世の中は不安ばかりで変化が激しく先が見えない時代だが、逆に言えば、今ほど面白い時代は今までなかったと言える。人間を貫くように生きていこう。」「世の中は何も完成していない、まだまだ世の中はできることだらけだ。」「誰かの役にたつことを、あきらめる必要はない。」と若者にメッセージを届けてくれました。

本市においても、志を高く持ち、可能性に挑戦できる子どもたちを育てていくうえで、「学びの転換」の必要性を改めて実感しました。

一冊の本を通して

元一条高等学校校長の藤原和博氏が2017年に書かれた本『10年後、君に仕事はあるのか』を久しぶりに読み返しました。この本には、AIや自動化の進展により、多くの仕事が消滅していく未来を予測し、その中で生き抜くための「雇われる力」の重要性が説かれています。

本書で予測された以上のスピードで生成AIが進化し、私たちに求められるスキルも変化し、教育の形態も多様化しています。

そのために、「変化をおそれないこと」「自分の強みを生かすこと」「学び続ける姿勢」「人間関係」を意識する必要があります。本書で描かれた未来は、すぐ目の前に来ています。変化を恐れず自分自身の成長に努め、未来を切り開く子どもたちを育てていきたいと思えます。

ここ数年の大きな変化について

本市では、一人一台の ICT 端末を活用した個別最適で協働的な授業が浸透してきています。

また、HOP 青山をはじめとする公設フリースクールや校内フリースクールは、不登校支援児童生徒の支援の幅を広げています。コミュニティ・スクールの制度も令和元年度にすべての小中学校で設置が完了しました。

教員の負担軽減として、「学校業務支援員の配置」や「業務時間外の留守番電話対応」、「部活動の地域展開」も進めています。さらに、はんこや紙の文化も随分と変わり、年度初めの保護者提出書類の電子化も進めてきました。

このように、様々なことが「バージョンアップ（更新）」していますが、ハード面だけでなくソフト面のバージョンアップも必要だと考えています。その一つが、先生方が担っている「授業そのもの」の更新です。その背景にある、教員の役割や学校の存在意義についても、焦点をあてていかなければなりません。

時代の変化とともに、ハード面もソフト面もバージョンアップしていく、そういう俯瞰的な視点ももちつつ、日々の学校経営を進めてください。

過去から現在、そして未来へ

過去	現在 → 未来	更新 バージョンアップ
チョーク&トーク 一斉型授業	一人一台端末を活用した 個別最適で協働的な授業	 【ソフト面の転換】 授業の在り方 教員の役割 学校の存在意義
担任による 不登校児童生徒支援	多様な教育環境の整備 (HOP青山、HOPあやめ池、 校中フリースクール等)	
地域と学校の協議体 なし	コミュニティ・スクール (学校運営協議会制度)	
教員の負担増	学校業務支援員 留守番電話対応 部活動の地域展開	
紙での動息管理	動息管理システム	
はんこ文化 紙文化	電子化&クラウドベース	
盛りだくさんの行事	行事の精選 (運動会の平日開催等)	

奈良市総合教育会議について

1月20日に、「奈良市の目指す学びの変革」をテーマに、市長・教育委員による奈良市総合教育会議を開催しました。

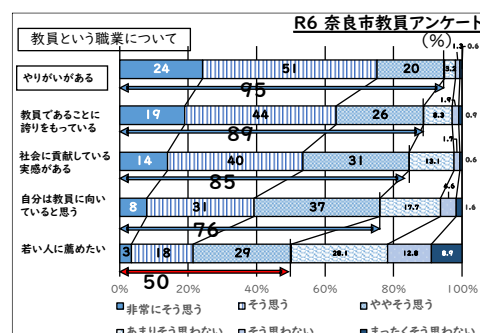
市長や教育委員からは、「子どもの AI 利用に関する環境整備は喫緊の課題である。」、「誰一人取り残さない教育に関しては、公設フリースクールはじめ、奈良市が積み重ねてきたノウハウをうまく生かしてつないでいく取組が必要だ。」、「考え方、取り組み方のマインドセットは、教員だけではなく、保護者や地域にも変化が必要である。」、「地域、保護者をしっかり巻き込んで、多くの体験ができる学校に整えていくことも大事だ。」など、様々な角度からご意見をいただきました。

奈良市教員アンケートについて

本市では、今後の教育行政のあり方を考える基礎資料とするために、「教員アンケート」を実施しました。現在、集計と分析をしていますが、速報値として紹介します。

「教員という職業について」の調査では、「やりがいがある」「教員であることに誇りをもっている」の質問に対して、「肯定的に回答」した割合が、それぞれ 95%、89%と、非常に高いことが分かりました。

「やりがいがある」について見ると、過去 3 年の経年変化を見ても、「肯定的な回答の割合」が高くなっています。年代別では、30 才から 40 才未満のいわゆるミドルリーダー世代の「肯定的な回答」が低く、この傾向は、昨年度も同様でした。



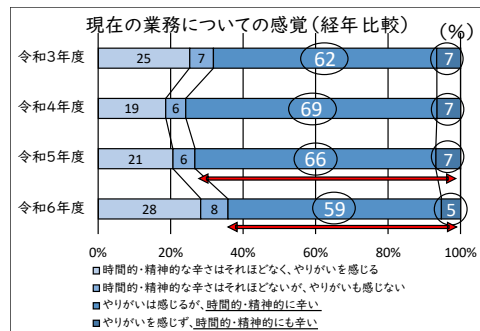
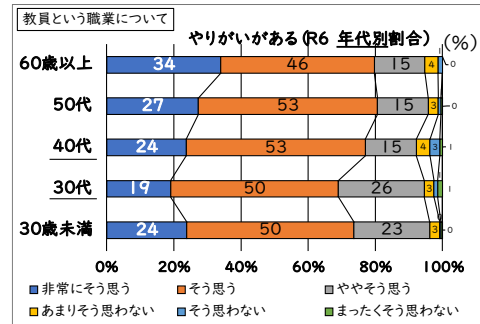
ミドルの年代は、責任あるポジションを任せられ、さらに異動等環境の変化がある中で、自分自身のキャリアについて考える時期で、若手とベテランの狭間で、いろいろ考えることも多くあるのではないのでしょうか。

学校長には、ミドルリーダー世代にも目を向けていただき、意識的に声をかけるなど、丁寧な対応をお願いします。

また、「職かい別」では、教諭で「肯定的な回答」の割合が少し下がり、教頭になると、「非常にやりがいがある」と回答した割合が少し下がる傾向がありました。このことについては、どこに手立てすればよいのか、考えていきたいと思います。

「業務のやりがい」や「時間的負担の大きさ」についての傾向は大きく変わっていませんが、やりがいのある・なしに関わらず、「時間的・精神的に辛い」と回答している割合が、昨年より10%近く減少しています。多くの教員が時間的・精神的に辛いと感じる一方で、少しは改善の兆しも見えてきていると言えます。

また、「自由記述」についても300名を超える先生方から意見をいただき、すべてに目を通していただいています。



来年度に向けて

国においては、12月25日の中央教育審議会での諮問を皮切りに、次期学習指導要領に向けた議論が本格的に始まりました。本市としても、しっかりと注視していきたいと思います。

また、約50年ぶりとなる教育調整額の引き上げや定数改善等の変革が起こり、デジタル教科書の「教科書化」に向けた議論とともに、「学びの転換」は待ったなしの状況です。

校長先生方には奈良市の教育ビジョンをしっかりと理解し、自分の言葉で教職員に語ってほしいと思います。目の前の子ども達に対して、教育者であるという「責任と自覚」をもって関わってください。

最後になりますが、来年度も学校長として学校の舵を握っていただく先生方につきましては、大きく変化していく時代の中で、子どもたちの学びを止めることなく、引き続き、誰一人取り残さない「ウェルビーイング」な取組となるよう、お願いします。

皆さん、一年間ありがとうございました。

新年度に向けて

- 次期学習指導要領に向けた議論開始
- 「学びの転換」まったなし
- 教職員としての「責任と自覚」